

第29期新潟市社会教育委員会議

実施年月日	第10回 平成23年11月29日(火) 実施		
会場	市役所本館3階 対策室1	傍聴人	0人
会議内容	<p>1. 開会</p> <p>2. 報告事項</p> <p>(1) 各種大会等の参加報告について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「第11回新潟県社会教育研究大会」(村上市) 参加報告 ・「第42回関東甲信越静社会教育研究大会」(つくば市) 参加報告 <p>3. 協議事項</p> <p>(1) 今後のスケジュールについて</p> <p>(2) 建議第2章の文章(案)について</p> <p>(3) 建議第1章の項目だてについて</p> <p>4. その他</p> <p>5. 閉会</p>		
出席者	<p>【社会教育委員】</p> <p>相庭和彦 板垣徳衛 伊藤裕美子 梅津玲子 笠原孝子 川上光子 雲尾周 新藤幸生 中村恵子 西田卓司 南加乃子</p> <p>【事務局】</p> <p>朝妻教育次長 邊見教育次長 玉木生涯学習課長 和田中央公民館長 頓所豊栄公民館長 山田中央公民館長補佐 本多課長補佐(地域と学校ふれあい推進課) 福島大畑少年センター所長 小川課長補佐(生涯学習課) 原係長 相崎主査</p>		
資料	<p>次第、</p> <p>資料1 今後のスケジュールについて</p> <p>資料2 建議第2賞(案)について(雲尾委員分)</p> <p>資料2-1 建議第2章(案)について(中村委員分)</p> <p>資料番号なし 団体ヒアリング調査の概要</p> <p>資料3 建議の構成について</p> <p>資料4 建議についての事前課題</p> <p>資料5 「家庭と地域の教育力に関する調査」のねらいと設問構成</p> <p>その他</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「第11回新潟県社会教育研究大会村上大会」参加報告(新藤委員) ・「第11回新潟県社会教育研究大会村上大会」参加報告(笠原委員) ・「第11回新潟県社会教育研究大会村上大会」参加報告(伊藤委員) ・「第42回関東甲信越静社会教育研究大会」参加報告(板垣委員) 		
会議録	<p>1. 開会</p> <p>(事務局)</p> <p>では、ここからは、相庭議長に進行をお願いしたいと思います。よろしくお願いたします。</p> <p>(相庭議長)</p> <p>皆さんこんにちは。お忙しい中お集まりいただきまして、誠にありがとうございます。ただいまより、第29期新潟市社会教育委員会議の第10回目を始めさせていただきます。</p> <p>本日の出席につきまして、事務局よりご報告いただきます。よろしくお願いたします。</p> <p>(事務局)</p> <p>本日は、梅津委員から少し遅れるという連絡をいただいております。新潟市社会教育委員の会議</p>		

第29期新潟市社会教育委員会議

運営規則第9条に定める開催に必要な人数の過半数を満たしておりますので、ご報告いたします。また、中村委員は本日所用のため4時ころ退席ということで伺っておりますので、よろしくお願いいたします。

本日の会議につきまして、傍聴の定員を5人として周知いたしました。傍聴希望はございませんでした。あわせてご報告いたします。

なお、本日、新潟日報の記者の方が、取材に入っております。

また、本市に実務研修に来られております、文部科学省文教施設企画部施設助成課の大西珠樹さんからこの会議に参加いただいております。よろしくお願いいたします。

(大西)

研修で新潟市に来ております大西と申します。よろしくお願いいたします。

(事務局)

以上、私からの報告を終わります。

(相庭議長)

それでは、報告事項に即しましてよろしくお願いいたします。各種大会等の参加報告についてですが、村上市で開催されました研究大会でございますが、新藤委員、笠原委員、伊藤委員の3名が参加されました。ご報告をよろしくお願いいたします。

新藤委員からお願いします。

(新藤委員)

レジメを見ていただければわかりかと思えます。村上で大会がありまして、そこの分科会を担当ということで、話題提供という形で参加させていただきました。10月13日、話題として、研究主題、社会の変化や要請に対応する社会教育のあり方ということで、私も振り返りましたら、もう6年もここにおじゃましているという変な状態になっておりましたので、断り切れずお受けいたしました。お騒がせいたしました。

6年間でかかわったものが、流れとして、いろいろな形で各地域で取り組まれている生涯学習、いろいろな課題の研究からアンケートという形につながってききましたので、その一連の流れということで、私どもがかかわって活動したものを報告させていただきました。ここにも書いてありますけれども、報告というよりも、質疑が90分もありましたので、どういう状態に話が飛ぶかというのが分からなかったのですけれども、あくまでも、やったこと以外は答えないという強い意志を持ちまして、それ以外は、分かりませんということにしまして、司会を務めてくださる原係長並びに、事務局として応援いただいた相崎さん、真柄先生から当日は助言をしていただきました。伊藤委員からは分科会の報告ということでいろいろとお世話になりました。本当にありがとうございました。

以上で終わります。

(相庭議長)

ありがとうございました。

3人の報告を受けてから質問ということにしたいと思います。

笠原委員、よろしくお願いいたします。

(笠原委員)

まず、県大会に参加させていただきましたありがとうございます。

内容ですが、今お話がありましたように、1日目に分科会、2日目に講演会というスケジュールでした。二日間にわたっての開催というのは今回が最後だそうです。次回からは1日だけの開催で、情報交換会は行わないということでした。市町村によっては参加人数の制限をしないで、参加したい人はどなたでもどうぞという呼びかけがあったそうです。ですから、多分、いつもよりも参加者は多かったのではないかと思っています。

1日目の分科会で、新藤委員が発表されました。主な内容は私の報告書でも箇条書きにしてあげておきましたけれども、新藤委員は育成協の会長をやられておまして、普段、直接子どもたちと

第29期新潟市社会教育委員会議

かかわったり、保護者の方たちとかかわっている人の話というのは説得力があると思って聞いておりました。本当は、基本計画や調査内容について少し突っ込んだ質問が出るのではないかと思います。そして、そのときは私ごと、一応、殊勝な心がけで参加したのですけれども、全くその必要はありませんでした。

情報交換会で分科会の話が出ました。上越市が劇場型というパフォーマンス型の発表をいたしました。これが話題になりまして、新しい形でおもしろかったと言われたのですけれども、参加者の意見を聞いたということでは、新潟市が一番よかったというご意見をいただきました。あるところの分科会は、発表者の後にすぐ助言者に投げたというのです。会場からは二人くらいしか意見が聞けなくて、また、最後の締めが助言者のところにいったので、会場の人たちは少し不満だったということがありまして、それから見ると、新潟市は一つ一つ丁寧に会場に投げかけてくれて、とてもよかったという感想を聞くことができました。

二日目の伊藤委員の報告は大変分かりやすいものでした。最後は、お茶の水大学の三輪健二先生の講演でした。先生がかかわっている江戸川総合人生大学の取り組みについての話でした。ちなみに、この大学の学長は北野大さんだそうです。

社教主事講習の取り組みを紹介して終わりにしたいと思います。お茶の水大学では、今年5月から主事講習を1年を通じて行うことにしたそうです。つまり、土曜と日曜と月曜日の夜6時30分から9時30分実施だそうです。これまでの主事講習というのは短期集中型で、ある意味忍耐力を強いるものだったというお話で、その例として新潟大学の話が出ました。先生が来られたときはとても暑い日で、しかも、教室にはクーラーがなくて、男の方は上半身裸で講義を受けるというような状況だったと。そういった過酷なところではなくて、もっと受けやすい状況で、しかも、今、活動している人たちのためになるような講習というものがこれからはあったほうがいいのではないかと。今年5月からこういう方法をとって行っているそうです。お茶の水大学から全国の大学にこの方式を広げていきたいというお話でした。

(相庭議長)

ありがとうございました。

続きまして、伊藤委員、お願いいたします。

(伊藤委員)

大変勉強になる場に出席でき、大変ありがたかったというのが感想です。先ほどお話がありましたように、新潟市で第4分科会を担当するというので、私は記録係で参加いたしました。二日目、第4分科会の、中身の大変濃いものを5分で報告するというので、十分冷や汗をかかせていただきました。

第4分科会の内容につきましては、相崎さんに、音声を起こしていただいたものを大事に、私は恩返しのため、紡ぐつもりで14ページという膨大なもので発言も多かったのを、それを4ページに紡ぎ直す、織り直す作業に大変エネルギーを費やし、県のほうへ報告させていただきました。一番最後にありましたように、知の循環型社会ということでお話をいただいたかと思うのですが、それにつながるような、自分たちの分科会もつながりまして、個人の自己実現から役立つ喜びへということ、自分も地域では取り組んでいるところがありますけれども、その辺の大変大きなヒントをいただいたのではないかと。心よりお礼申し上げます。皆様、ありがとうございました。ご苦労さまでした。

(相庭議長)

ご苦労さまでございました。

村上大会について、ご意見やご質問がございましたらお願いします。いかがでしょうか。

社会教育主事講習で相当新潟大学の悪口が出たと見えますが、ほかの主事講習の中で私たちの主事講習の満足度が日本で一、二を争います。ですから、三輪さんにはぜひ10年続けてもらいたいと思います。

第29期新潟市社会教育委員会議

なければ先に進めたいと思います。

続きまして、第42回関東甲信越静社会教育研究大会（つくば市）に参加された板垣委員、よろしくお願ひします。

（板垣委員）

11月18日午後からの半日日程であります、事務局から原係長が同行してございまして、二人で行ってまいりました。つくば市で開催されたわけですが、東日本大震災の影響が大きく、3か月遅れの開催ということでありました。本当は8月に開催される予定で、1泊2日といっていました、結局は半日日程ということになったようであります。

歓迎講演ということで、野口雨情という方のお孫さんが講演してございまして。童謡詩人だそうですが、歌ったり、詩を紹介したりということで、久々に心が洗われるような詩、歌に触れさせていただきました。

本番はシンポジウムなのですが、新しい時代（協働の時代）の生涯学習を推進するために、社会教育委員の新しい姿を探るということで、シンポジウムは5名の方が話をしてございまして。ただし、一人10分くらいで、最後に、社会教育委員に望むことを最後に一人2分くらいずつということで、それで終わるような会議でございまして。

報告書の裏面に、主な先生方の発言を載せてみました。基督教大学の川上美智子さんですが、公民館が最近、市長部局に移っていると。「市民センター」と名前を変えて、そこが生涯学習の中心になっているということをお話しておりました。茨城大学の長谷川幸介先生は前から知っていますが、コミュニケーションが非常に大事であると。無縁社会と言われる中で、社会教育はその役割を果たしてきたと。これからも社会教育が大事だということをお話しておりました。NHKが無縁社会を取り上げたということで、それに対する不満もお持ちのようでございまして。常磐大学の金藤ふゆ子さんは、行政の立てた計画に市民が乗っかってやるというやり方から、市民が中心に計画を立てるように早く変えていかないとだめだということをお話しておりました。細かいものは書いてあるものを見ていただくということで、報告にかえさせていただきたいと思ひます。

（相庭議長）

ご苦労さまでございまして。

関東甲信越静社会教育研究大会の板垣先生のレポートでございまして、ご質問、ご意見はございませんでしょうか。

（笠原委員）

今回の大会が、公民館と社会教育研究大会の合同大会でしたね。だけれども、次回はまた別々に大会を行うわけですね。その後はどういう予定なのでしょう。合同というのは1回だけでももう終わりということなのでしょう。

（板垣委員）

これは、たまたま茨城で公民館と社会教育研究大会と両方が重なったので合同でやったのです。長いサイクルの中には、また、県で重なることがあれば合同だと思います。そうでなければ全部別々だと思います。

（雲尾委員）

再来年は関東甲信越静公民館研究大会の当番が新潟ですので、来年の長野大会の様子を見に行く必要もあるかもしれないという話が出ております。皆さん、再来年は心づもりを。

（相庭議長）

再来年はいろいろなものがあつちますね。政令指定都市の社会教育委員会議も、来年が大阪の堺で、その次が私たちです。大変忙しくなるかと思ひます。

ほかにいかがでしょうか。

先ほどの板垣先生のご報告を聞いていますと、やり方をそろそろ考えたほうがいい時期にきているかもしれないですね。少しお話をして、ほとんど発言もなく、ご苦労さまでしたという終わり方で、

第29期新潟市社会教育委員会議

果たして社会教育の意見交換の場になっているのかどうかというのは問題のあるところだと思います。新潟でやるときは、多分、雲尾先生が中心になるかと思いますが、大いに方法を変えてやっていただけたらと思います。先ほどの報告で、三輪先生がいらっしゃるのだったら、私も行けばよかったと思います。そうすれば、大変楽しい討論ができたのではなかったかと思います。再来年は、政令指定都市の社会教育の大会もありますので、そのときは大幅に変えようということを皆さんと話したところです。

ほかにご意見はございませんでしょうか。よろしいでしょうか。

それでは、協議事項に入らせていただきたいと思います。まず、協議事項第1でございますが、資料1の今後のスケジュールでございます。事務局から説明をお願いいたします。

(資料1「今後のスケジュールについて」に基づき事務局より説明)

(相庭議長)

今後のスケジュールでございますが、予定をよろしくお願いいたします。特に3月は多忙を極める時期だと思っております。よろしくお願いいたします。このスケジュールにつきましては、よろしいでしょうか。

それでは、協議事項の2番目でございますが、建議第2章の文(案)につきまして、雲尾先生からよろしくお願いいたします。

(雲尾委員)

文(案)でございますが、資料2の第2章、調査から見えてきたことということで、第1節、地域における子どもたちの様子、第2節、地域の大人と子どもとのかかわり。これにつきましては、昨年度調査からのものであるということを示し、第3節は本年度調査の部分から、12月発表と書いていますが、平成24年1月になるかもしれませんが、それで展開していくということで、第3節、第4節はこれから行っていくと。特に地域における子どもたちの様子と、地域の大人と子どもとのかかわりに関連する部分を抜粋して示しています。子どもたちの様子について、昨年度調査では、市民から子どもたちがどう見えているのかという中で言うと、子ども同士仲良く遊んでいると答えた人が最も多かったが、見かけないとか、よく身体を動かしている、マナーがよくない、などがあると。子どもたちは主にどこで遊んでいますかという問いに対しては、家の中や広場、道路等が出ています。これらを裏付けるものとして、自由記述の中から抜粋しました。これらの抜粋をとおして見ると、まず、環境整備が必要なのではないかということがいえると。これは第1節の部分です。

第2節の部分は、地域の大人と子どもとのかかわりでいいですよと、問14のところを特に取り上げて全部並べてみましたが、いずれを見ても、最も高いのは、「④道であったとき、あいさつする」であります。ほかのものはだんだんと減っていて、かなり少ないということが言えます。同じように自由記述から見えていくと、地域の子と接する機会に関することを全部あげた中で、注目してほしいものは「・」を「○」に私のほうで変えました。「通学時に戸外で会って挨拶する子を見ると、とてもうれしい」とか、「自分の子どもが他人から注意や指導を受けたら親として感謝し、恨んだり拒否したりするべきではないと思う」などです。大人と子どもとのかかわりが濃いとはいえないという自由記述が多いということが見てとれます。

そこで、3ページに入りまして、このような接し方であるので、最近1年間の活動について見ると、参加していないという人が6割以上、7割近くいると。参加した活動は、「子どもたちに祭りや伝統行事などを教え伝える活動」や、「地域の人や親子がふれあい交流する活動」等が多いこととなります。活動に参加したきっかけ等を見ていくと、「頼まれた」「地域で活動することに興味があった」等となっています。このように、必ずしも積極的に子どもとかわる活動に参加しているわけではないが、この後も地域の子とかわる活動に参加したいと思うかということについては、半数以上が参加したいと思うとなっています。参加したい理由を見ると、「大人同士で人間関係

第29期新潟市社会教育委員会議

が広がった」等があり、このようなことから考えると、子どもにかかわる活動に参加していた人たちは継続的にする可能性が高いと。

そうでない人たちについて「身近に活動に関する情報がない」、「職場における時間的なゆとりがない」、「体力的に自信がない」、「家庭における時間的なゆとりがない」と理由は分散しており、一つの施策だけではなかなか参加は進まないという結果であると。そこで、聞いてみたところによると、「子どもたちの居場所、遊ぶ場所を作る」と答える人が最も多く、「親子で参加できる活動や体験の場を重視する」、「仕事と家庭の両立ができるように支援する」等となってきます。これらをまとめると、地域の子どもたちとかがかわる活動については、内容的により一層多様に取り組むことが求められているし、それらの活動への参加意欲も広く存在している。活動の幅を広げたり、種類を増やしたり、量を拡大したりすることに併せて、広報活動の充実、人と人のつながりを大切にすることがうまくいけばということが、施策の方向性として見えるということが、地域の大人と子どもとのかかわりの部分です。

第3節、地域における各種団体の子どもへのかかわり。これはまだ今回、報告書にまとまっていない部分ですけれども、ざっと全体を見た中で言いますと、どのような活動を行っているかという点でいうと、「町内会などの地域活動や地域運営にかかわる活動など」と答えた団体が多いということになります。これらの団体が地域で行っている子どもとかがかわる活動については、うまくいっているところが70.5パーセント、うまくいっていないは4.5パーセントにしかすぎません。よかったことがあったというところも85.7パーセント、よかったことはなかったが1.8パーセントにすぎません。総じて、それぞれの団体は子どもたちがかわる活動に効力感を持っています。よかったことがあったと思われることも聞いていくと、多種多様なよいことというのは、基本的な部分でよさを感じているようであります。

今後、これらの団体の方向性として、ほかの団体や機関との連携・協力、これが今回の設問の中でもとりわけ中心に聞いているところですが、現在は連携・協力を図っている団体、かりに団体①としますが、65.1パーセントと多いが、その次に多いのは、連携・協力を図っていないし、今後も図る必要はないという団体。連携・協力を図っていないが、今後は図る必要がある団体、これは②としていくようになります。団体①に対して連携・協力団体を尋ねたところ、小学校や中学校、コミュニティ協議会等になりますし、さらに連携を望む先として、社会教育施設等が出てきます。団体②は小学校、中学校、コミュニティ協議会等となっています。地域全体で子どもたちをはぐくむためにはどのようなことに力を入れたらよいかということでは、親子で参加できる活動や体験の場を充実する等が出てくるわけです。

諸団体の影響を深めつつ、これらの施策を行っていくことが求められていることが、今回の調査からも言えるのではないかとということが3節までです。

4節については中村委員からお願いします。

(中村委員)

私のほうは、団体ヒアリング調査についてまとめたものです。事務局から一覧表で「団体ヒアリング調査の概要」ということで、ヒアリングした団体の概要について示していただいたものが資料として後ろにつきます。まとめ方を迷ったのですが、雲尾委員のものは原稿としてまとめているのですが、私のものは下書きの下書きみたいな感じなので、この方向でよければ、これを少しふくらませて、文章の説明を加える形にしていきたいと思っています。

それぞれ特徴のある団体に聞きましたので、それぞれ独自性があるので、それをどうまとめるかということで、一つはかかわりを作り出す取組みということでまとめました。先ほど、いろいろな大会に参加された方々もおっしゃっていましたが、協働、ネットワーク、かかわり、つながりという、似たような言葉ですが、多分、そこがキーになっているのだろうと。雲尾先生のところに「かかわり」という言葉を使ってありましたので、私も「かかわり」にしておこうみたいな感じで、「かかわり」としました。いろいろな取組みの例があがっているので、そこら辺のところも具体

第29期新潟市社会教育委員会議

的なものをあげたほうが、よりイメージしやすいと思って、箇条書きで書いてあります。

最初のほうは、子どもと自然や社会とのかかわり。子どもが物事にかかわっていく。この分類を考えたときに、一つはケアリングということを考えて、ケアリング教育の分類があるので、その概念をもう少し大まかに分けてみました。そこに主な例と、その活動の趣旨としてどのように取り組んでいるのかと。あるいは、それをすることによってどのようないいことがあるのかということを書きました。

人とかかわりということ、人というのは子どもだけではなくて、子ども同士、子どもと大人、そこに集う大人同士というのがあるし、立場の違う者同士をつなげる。例えば農作物を作る人と、それを販売する人という、立場の違う人同士がつながっていく。あるいは若者と高齢者という異世代の方たちをつなぐ場ということがあげられると思います。

家庭や企業地域、地域のつながりについては、とにかくつながっていくということなのですが、企業と世帯といったもの、企業同士とか、いろいろなものがつながるということです。もう一つおもしろいと思ったのは、これは別枠を設けてもいいかと思ったのですが、あまり幾つもの項目を立てると面倒くさいので、一応入れたのですが、価値を作り出して行って、それを業界に広げていくという、原常樹園さんの、公園という今までの癒しの空間から、そこが活動の場、教育の場になっていくのだという、その価値を発信して業界に広げていく。価値の概念に対してケアリングしていくということもあげられていて、それを別枠に入れようかと思ったのだけでも、それもどうかと思ったので、ここにあるのですが、ご意見をいただければと思います。

②の持続可能な取り組みというのは、一つは課題ということなのです。いかに持続可能な取り組みにしていくのか。これはどの団体においても大きな課題になっていると思います。ただ、課題というふうにしなかったのは、例えば「トキっくらぶ」であるとか、うまくいっているところもけっこうあって、ただ、ほかの企業が取り組むとしたらこういう課題があるということと掲げられているところもあったし、自分自身も、今、これが課題なのですということもあって、団体によってそのとらえ方がいろいろだったので、一応、持続可能な取り組みにしていくということが大事ということで、その一つがメリットの創出です。活動に参加することによって何かしらのメリットがなければいけない。メリットという言葉がいいのかどうか分かりませんが。やはりキーパーソンというのは非常に大事になりますので、人材の発掘および育成をどうしていくのかということが大事になってくるということで、主に二つの点をあげました。

③地域の教育力の向上というのは、ヒアリングの最後のほうの質問項目のところ、地域の教育力の向上について何か一言あればということがあったので、何人かの方が言っていたのですが、自分の活動の中であげられているものもあって、これは果たして別枠を設けたほうがいいのかどうかと思ったのですが、一応、あげてみました。例えば「キッズキッチン」など、施設がなくて困るとかという、課題として落ちてしまったものがあるので、そこら辺のところをどう入れるかということもあるのですが、このような形の柱組みでまとめられないかという提案です。

もしご意見をいただいて、いいものがあれば、別な柱組みでまとめ直すとか、構成し直すということは可能ですので、いろいろとご意見をいただければと思います。

一つお考えいただきたいのは、雲尾先生が第1節、第2節、第3節、私が第4節となっているのですが、自分で書いてみて、1節、2節、3節に関しては、一つの量的な調査、アンケート調査がベースになっていて、私はヒアリング調査ということで、質的なデータになるし、調査方法が違うので、第1項、第2項にしてもらったほうが、題目のバランスもとれるのではないかと。例えば団体ヒアリング調査という、これも何か辺なのですけれども、雲尾先生のように、何とかのかかわりと書いてしまうと、何が何だか分からなくなってしまうので、できれば、雲尾先生のところを第1項、私のところを第2項という形に項目だてをしていただくと、かえって分かりやすいのではないかという気がしました。私のほうは雲尾先生のように4ページにはなりません、3ページくらいにはふくらまし可能だと思います。検討いただければと思います。

第 29 期新潟市社会教育委員会議

(相庭議長)

大変ありがとうございます。たくさんの調査をまとめていかなければならないという作業は、大変骨の折れる作業であるとお察しいたします。

それでは、ただいま、中村委員と雲尾委員から説明がございましたが、ご意見、ご質問等はございませんでしょうか。

細かいところで、確認ですけれども、先ほど中村委員が言ったのは、2章3節の中で、雲尾委員が①で団体調査というのを書いていて、それを1項として、中村委員が書くところを2項にしてほしいという要望ですね。

(中村委員)

調査の対象、ベースになっているものが違うので、そのほうが分かりやすいと思うのです。

(相庭議長)

私もそのほうが読みやすいと思います。

(雲尾委員)

中村委員が、(4)の団体ヒアリング調査としているものを第2項にするということですね。ですから、第1項の題を何か考えないといけないということですね。

(中村委員)

そうですね。先生のところで第1項を入れていただけるといいですが。

(雲尾委員)

第1項で何か題名をつけて、中村委員のほうは第2項で、ただ団体ヒアリング調査でいいですか。

(中村委員)

これは少し考えないといけないと思います。それは先生とあわせたほうがいいと思います。

(相庭議長)

2章は3節だてになっていたのです。最初が地域における子どもたちのようすというのが1節で雲尾先生、2節が地域の大人と子どものかかわりが雲尾先生、3節のうちの団体実態調査というのが雲尾先生で、ヒアリング調査が中村先生という形で分かれていて、そこのところは項にしないで、2章第3節の中に共存していたのです。それを、項をたてて、雲尾先生が担当される場所、つまり第2章第3節第1項が雲尾委員の担当、そしてタイトルをつけたほうがいいたろうと。第2章第3節第2項が中村委員担当ということで項のタイトルをつけるというのが中村委員のご提案なのですが、私も提案のほうが分かりやすいと思います。もともと調査が二つに分かれているものですから。まずは外枠の話でした。

ほかにいかがでしょうか。

(笠原委員)

雲尾先生のところなのですが、バランスでいいますと、(1)、(2)、(3)でいうと、(1)、(2)は自由記述がついていますので、(3)のところにも自由記述を入れていただきたいと思います。説明があって、自由記述がそれぞれ入っていますので、(3)についての自由記述はあがっているわけですから、これがあつたほうがいいのではないかと思います。

もう一つ。(2)の数字の取扱だけが3人中2人とか、5割とか4割という表記なのですが、ほかパーセンテージを使っていますので、ここも同じように66パーセントで3人中2人とか、5割強でなくて53パーセント、4割強でなくて42パーセントと実数をあげたほうがバランスがとれるのではないかと思います。

(相庭議長)

ありがとうございます。

どうですか。

(雲尾委員)

自由記述については、これを書いた時点でまだまとまっていなかったもので、整理がされていなか

第29期新潟市社会教育委員会議

ったので入れなかったということが正直なところで、入れるか入れないかは分量にもよるところがあるのです。自由記述がまとまったものを見てから検討しますが、なるべく入れたほうがよからうというお話は分かります。

2ページのところは、問14自体に表を載せたので、それでよからうということで、省いただけなのです。ほかのところはそういう数字が入っていませんので分からないために一つひとつ数字をあげていますが、ここは表に数値があるので細かく書かなくてもいいかと思ったところですけども、皆さんが、やはりこれもそろえたほうがいいというのなら、そうします。

(相庭議長)

最初の点はよろしいですか。後半の数字もそろえるのですけれども、データを出して、こういう文章にすると、この中では何パーセントと入っていますよね。正直、読みにくいです。学生の修士論文、卒業論文だとけっこう大事に扱うのですが、こういうものというのは、読んでもらってこそ、読みやすさこそすべてなので、私は、雲尾先生が書かれているように、ほめるが4割強ということで十分ではないかと考えます。というのは、下のデータがあがっていますので、ここで何パーセントとされますと、大体目が疲れてきて、自由記述の部分になると飽きてきて、恐らく三つ目のパーセンテージは読み飛ばしという形になりますので、忙しいときでも読める内容にしていたほうがいいのかと思うので、なるべくパーセンテージが省けるところは省いたほうがいいのかと思います。雲尾先生の、地域の大人と子どものかかわりの書き方で私はいいのではないかと思います。

ほかにいかがでしょうか。

(板垣委員)

これを読んでいて疑問が一つあったのですけれども、住民から子どもの遊び場を作ったほうがいいのか、公園を作ったほうがいいのか、何か作ったほうがいいのかという意見が出てくるのです。それはないよりはあったほうがいいに決まっているのだけれども、物や場所だけではなくて、もっと別な迫り方というものがあるのではないかと。住民からの要望を読んだうえでそのようなことをふっと感じました。

(中村委員)

それに関して言うと、そこら辺は企業が一步意識が進んでいて、価値を上げるとか、西田委員のところやっているように、新たな価値を作り出すとか、そこら辺は先進的にやられているところだと思います。それは後ろのほうに活かせるような提言かなと思います。

(相庭議長)

作ってくれというオンリーのデータになってしまうのです。これは扱い方を間違えると、そういう話ではないと思います。

(中村委員)

ハードなものではないということです。

(伊藤委員)

今のことに関連するかもしれないのですけれども、公園などを造ってほしいと、実際に市民が要望する。だけれども、あなたたちも担い手になれるのだという投げかけもきつとしていきたいと思えますので、実態は実態として、このことを逆に示し、一緒に教育力を上げるために一緒に考えながら、市民の皆さんもやりましょうという方向になりたいという意味で、今の疑問というのは逆にいいのではないかと。ビジネスチャンスかなというか、分かっていたら、やれば楽しいという話もあるという分析が出ましたけれども、企業はそういう意識があたりだということと、やはり課題もあるという、いろいろな中から、何をしたいかと考えたために、私たちは提言をさせていただくのだと思いますので、逆にそれを示すことが、私たちもこのところで考えさせていただきたいという理由になるかと思うので、大事にするというのは変ですけども、実態は実態として、市民の姿も描き出すことが必要ではないかと思います。

(相庭議長)

第29期新潟市社会教育委員会議

そうですね。伊藤委員がおっしゃるとおりですね。社会教育の立場からすればそうなりますよね。
(伊藤委員)

提言の意味はそれかなど。私も市民なものですから、一緒に考えてやっていけないことはないかと、皆さんに投げかけたいという気持ちです。

(相庭議長)

ほかにありませんでしょうか。

(笠原委員)

中村先生のところなのですけれども、これはまだたたき台だという話なのですけれども、説明文に少し抵抗があります。コミュニティ協議会、NPO法人、企業などにアンケートを実施しても回収が期待できないことが想定されるために、ヒアリング調査を行ったという説明があるのですけれども、(3)でNPOにも企業にもコミュニティ協議会にも調査をやっているわけですよね。団体調査のところ調査の結果が出ているのに、そういうところからは回答を期待できないという表現があると矛盾しているのではないかと思います。

(中村委員)

調査目的について、私のほうが書けなかったので、ここは事務局にお任せしました。調査内容は分かったし、調査時期も分かっていたけれども、目的を私のほうでは書けないということで、事務局にお任せしましたので、事務局のほうで答えをお願いします。

(事務局)

当初、団体調査を行う段階にあたり、ここでもご議論いただいたのですが、事務局のほうでは、今言ったNPOとか地域団体など、企業につきましても国の企業統計調査を使いまして、当初、二千社程度を想定し調査をかけようと考えていたのですが、ご議論いただく中で二千数社に一律に調査票を投げて、恐らく実際に企業は子どもにかかわる活動等をしているところはあまりないだろうと。どのようにすれば回収率が上がるかという費用対効果も考えまして、それだったら逆に、やっているところの情報をあたり、こちらから出向いて聞きに行ったほうがいいのかということで、企業についてはヒアリング調査で行わせていただきました。

今回、団体調査の中で行った事業所企業という項目がありますが、それについては、一般の企業というよりは、どちらかといいますと、財団法人、社会福祉法人といった法人を念頭に置いた調査であります。一般の企業というのはなかなか回収率も上がらないということで、ヒアリング調査を実施したということです。そういった説明をしたつもりでしたが、おかしいところがありましたら、見直しをしまして、その辺を入れていきたいと思っています。よろしく願いいたします。

(雲尾委員)

その部分はその部分で正しいとは思いますが、もう一つの目的としては、団体調査のアンケートを作るための予備調査としての位置づけもあったかと思うのです。ヒアリングをすることによって、どのような問題点、どのようなことをほかの団体に聞いたらいいかという、団体調査の質問項目を作るための予備調査的にやっていた部分もあったかと思うのですが。

(笠原委員)

団体実態調査として、NPO法人、地域コミュニティ協議会、事業所、企業というのがきちんとあがっているわけですから、そうすると、この文章というのは少し変かなという感じがしました。私たちはよく分かるのですけれども、その事情を分からない人がこれを読むとつながらないという感じがしました。

(相庭議長)

今のご指摘はよろしいですか。

(中村委員)

もう少しオブラートに包むということと、もう少しポジティブな言い方にして、詳細は分からないわけですよね。質的でないと。そこら辺の部分を加味して書くといいのではないかと思います。

第29期新潟市社会教育委員会議

ました。私も言っていたいて、ああそうだなと思うところがありますので、実践事例をより詳細に調査するためにとか、活動事例も多くはないくらいにしておくとかして、言い方を変えたいと思います。

(伊藤委員)

社会教育委員自ら訪問調査を行うことにより、より課題解決のための糸口を引き出せるのではないかと決定して、委員自ら行動して行ったみたいなの。いかがでしょうか。

(相庭議長)

そのとおりです。

(伊藤委員)

村上で勉強して、急にうろこが1枚半くらいぱらっとなったものですから、その辺をアピールすると、アンケート調査と違って委員の行動による調査ということで、それを2項に分ける意味にもなるのではないのでしょうか。

(中村委員)

かなり社会教育委員の存在を示した。

(伊藤委員)

そんなところまでアピールしなくていいですが、行くことによって見えてきたということも事実ですから。

(中村委員)

具体的な実情をよく知るためにみたいなことですね。目的を後から考えるということも変ですね。

(伊藤委員)

私もそれに荷担しているようなことになって、大変申し訳ないのですけれども、前向きに協議いただければと思います。

(笠原委員)

すらっといくようにお願いしたいと思います。

(相庭議長)

いい意見が出ましたが、よろしいですか。そのような形で修正願えればと思います。

(中村委員)

ありがとうございました。

(相庭議長)

ほかにいかがでしょうか。

(板垣委員)

特に文字の修正はいいでしょうか。

(相庭議長)

細かいところは、誤字脱字その他については。

(中村委員)

キーワードについては統一が必要だと思うので、雲尾先生は「おとな」というひらがなと漢字の両方使っていると思いますが、私は漢字を使ってしまったのですけれども、例えばキーになる言葉、「かわり」がいいのか「つながり」がいいのか、「協働」、「ネットワーク」などいろいろとあるのだけれども、そこら辺の言葉の精査というのは、あとでいいとは思っただけだけれども、できれば全部書き上がる前にある程度考えていく必要があるのではないかと。こういう言葉を使っていきましょうということは統一しておく必要があるのではないかと感じました。

(相庭議長)

ほかにいかがでしょうか。

大体よろしいでしょうか。今日は皆様のご協力によりまして、会議が順調に進行しております。ちょうど区切りがいいものですから、ここで少し休憩を入れたいと思います。10分ほどブレイクを

第 2 9 期新潟市社会教育委員会議

入れまして、3時10分から始めたいと思います。よろしくお願いします。

(休憩)

(相庭議長)

時間になりましたので、後半を始めたいと思います。よろしくお願いします。

それでは、第1章の建議の項目だてについてですが、資料が出ておりますので、事務局からお願いいたします。

(生涯学習課長)

資料3、資料4、資料5をお願いします。資料3は建議の構成について、前々からお示ししているもので、第1章には、なぜこの課題に取り組んだかというものと、第2章には調査の報告、第3章が今後の課題ということで構成を組んだものです。大体の構成はそのまま行きたいというお話をこの前から申し上げていました。

資料4は、この中身をどのように組み立てていくかについて、委員の皆様からフリートークングしていただきたいということで、特に第1章についてお考えをいただけないかと先回お願いしまして、ペーパーを事前にお渡しし、考えてくださるようお願いしたものです。家庭からみて、学校からみて、地域においてとお示しましたところ、非常に不評で、これでは書きにくいということがありました。恐らく全部書かれた方と一部書かれた方がおられるのではないかと考えております。これを手元に置いていただきながら、先ほど、調査の結果についての雲尾先生と中村先生からのお話も参考にして、第1章は板垣委員と梅津委員から建議の執筆をしていただくこととなります。今日は、全員がこうだったねということで目線あわせ、または問題意識を共通に持ちたいと思ひまして、第1章の目的の整理だと思ひいただき、資料5を見ていただきたいと思ひます。

委員の皆様にお願ひしまして、平成22年度は市民の意識調査の設問構成を作っただき、家庭と地域の教育力の設問とさせていただきます。結果がもう出ているわけです。平成23年度は団体の実態調査ということで、データ部分については委員の皆様にお渡ししてあります。データの分析については先ほど先生方から報告をいただいたところです。お二人の先生の分析の方向は、地域の教育力がどうなっているかということで、地域の教育力が私たちの疑問点であったわけです。地域の教育力が低下しているのではないかと。そのためにどうしていけばいいのだろうか、かかわっている人の意識、団体、企業といったものがどうなっているのかというのが最初のスタートだったと思ひます。それを、平成22年度は、家庭における子育ての状況、地域の様子がどうなっているか、地域で子どもとかかわる活動というのはどうなっているのかということ、市民の意識として調べてきたわけです。

今年に入りましては、幾つかの団体をピックアップさせていただいて、子どもたちとかかわる活動について伺いました。子どもたちにかかわっている活動をしているのかということ、それがほかの団体や施設と連携をしながらやっているのかということを見てきたわけです。そういう問題意識があったわけなので、地域の教育力が本当に低下しているのかということ、思い起こしながら、またはかかわっている人や企業や意識や団体の動きを振り返りながら、なぜ私たちはこの課題に取り組んできたのかということ、少し議論していただければ、板垣委員も梅津委員も書くのに楽なのではないかと思ひ、この時間はそれにあてさせてもらえればありがたいと思ひています。一斉に全部やるのも大変かもしれませんが、平成22年度の市民意識調査から振り返っていただひて、お話を進めていただければありがたいと思ひます。

(相庭議長)

今ほど玉木課長からご説明がございましたように、建議を書くにあたって、第1章の家庭と地域の教育力についてということで、この調査項目、つまり家庭と地域の教育力について、どういう形で私たちがその問題を見つめて、どう扱おうとして、地域の市民への意識調査がどのように生まれ

第29期新潟市社会教育委員会議

たのかということについて振り返ってみて、確認を入れて、そして板垣委員と梅津委員から文章を起こしてもらいましょうというのが玉木課長の趣旨でございます。

(中村委員)

その前に確認をしたいのですけれども、1章の扱い、位置づけについてなののですけれども、なぜこの調査をしたのかという、調査の目的を書くだけのものではなくて、地域、家庭の教育力の向上について、より広くとらえる、ただ調査のための目的ではなくて、なぜ、家庭と地域の教育力を向上させなければいけないのかという、もっと広いテーマで書くという話し合いを確かしたような気がするのです。例えば経済的に困っている家庭が多いとかというところは調査にあがってこないのだけれども、教育力の向上といったときに欠かせない要因というか、一つのキーワードになり得るという話が起草委員の中でも出たと思うので、調査で調べられることと、今言われている課題のブックングで書くという。社会的な背景とか、現代問題となっていることと調査でこういうことを明らかにしてやるものの両方があると思うので、調査の目的だけを書くが一緒ではないという位置づけだったような気がするのですけれども、そこら辺の確認をお願いします。

(生涯学習課長)

委員が言われるとおりに思います。調査の目的が第2章に、調査として第2章に表れてはいますが、調査を行うにあたっての背景はもっと広いものだったと考えておりますので、先回も起草委員の中で、資料3にも少しありますけれども、例えば困窮はどうだったかとか、困窮の度合いとか、親が働かない状態はどうなのかとか、学校現場ではどうなのだろうかというお話もありましたので、そういう点も含めてお話をいただければと思います。

(相庭議長)

今の確認でよろしいです。

調査目的というものに絞ってのご発言ではなくて、この調査が成立してくる背景であるとか、社会情勢であるとか、あるいは教育情勢であるとか、家庭の事情であるとか、そういうものを含めて書くということなので、ここで委員の皆さんからの意見をとりたいということが玉木課長のご発言だったかと思われます。これでよろしいですか。

(生涯学習課長)

お願いします。

(相庭議長)

それでは、お手元に資料5がございますが、この説明はいいですか。

(生涯学習課長)

申し訳ありません。先ほど私は、資料5に基づいてお話をしたつもりだったのですけれども、資料5のねらいとしては、地域の教育力が低下していると調査の結果として表れていたと。そのために、家庭、地域、民間、行政がその役割をそれぞれ担っていかなければいけないということをねらいとさせていただいています。資料5の左側の2番ですけれども、市民意識調査のアンケート調査の骨組みは左側のページに大きく3本の骨組みを立て、家庭の状況、地域の状況、地域の子どもたちとかかわる状況について想定させていただきました。右のページは団体の実態調査ということで、これはPTA、子ども会、青少年育成協議会などの団体に対して、現状としてはどうなのか。連携をほかの団体としているかどうかという骨組みにさせていただきました。ここには書かれていませんけれども、さらに企業の調査につきましては、先ほども話がありましたけれども、企業の訪問をして、企業の状態についても調査しているところです。このような構成で、全体の調査が進められたということを説明させていただきました。

(相庭議長)

分かりました。

それでは、委員の先生方からご意見をとりたいと思います。お手元に事前に配られた資料4を参考にしながら、昨年度の市民意識調査と今年度の団体実態調査についてご意見をとっていくことに

第29期新潟市社会教育委員会議

なるかと思えます。最初に、市民意識調査についてはいかがでしょうか。調査がここまで進んで、さあまとめるぞというときになって、最初はどうだったかということ振り返らせられても、なかなかご意見が出にくいとは思いますが、ある程度、委員の先生方からわりと自由に話を出していただきませんか、起草委員の方々が、果たして自分の思いで書いてしまっているのだからかという迷いが生じます。ですので、例えば起草委員会で出た意見としては、親を教えるのは地域であるとか、国の調査との比較であるとか、「困窮」がキーワードになるとか、親が働かないとか、一つ一つこのようなことを書き込んでいきたいというキーワードが出ておりますので、それに即してでもけっこうですし、また、こういうキーワードを文章の中に入れていただきたいというものであれば、そういうものに即して意見を出していただけると助かります。いかがでしょうか。

(伊藤委員)

意見になるのかどうか分かりませんが、キーワードがいろいろと出ていますけれども、つまりは、親だけでは子どもを育てるには厳しいというのが今の状況で、家庭では親だけでは子どもを支えたり育てたりすることが厳しい現実もあるから、結果として、地域につながっていくというお話を新藤委員がこの前お話しされましたけれども、その辺の現状が調査によって表れていたと感じています。だからこそ、その結果により、どうしようかということを考えていきたいと感じたところです。

(相庭議長)

ほかにいかがでしょうか。

平成18年度3月の文部科学省が行った調査というのが、地域の教育力は以前に比べ低下しているという回答が出ているのです。それについて、新潟市の場合をながめてみると、低下しているという結論よりも、調査としてはあまり変わっていないような結果が出ているイメージを受けているのですが、その辺はいかがでしょうか。まずそこから入っていてももらわないと困るだろうと。

もう一つ、地域の教育力を考えるときに、新潟市のコミュニティが、ある意味うまくいっているというか、ほかの都市化している政令指定都市と比べて、新潟というのはけっこううまくいっているほうではないかと、私個人の意見としては思うのです。その一番いい例が、例えば中央公民館で、政令指定都市で公民館が、しかも公民館運営審議会をもって運営されているというのは圧倒的少数派で、いつなくなっても不思議がないような状態に今なっているのですけれども、しかし新潟は磐石で、社会教育団体がかなりしっかりしているのです。

もう一つは、保護者団体、学校PTAの団体を見ても、新潟市では役員のなり手が少ないと言われますけれども、ほかの市町村、特に政令指定都市と比べますと、新潟市はわりとPTAとのつながりがきちんとできていて、各校区だけではなく、校区をまたいで、中学校区、複数中学校区での連携協議会があると。これも政令指定都市を見るとめずらしいケースになっています。ですから、地域の教育力がほかの地域と比べて下がっていると言われるわりには、新潟市というのは地域の教育力がそれほど下がっていない。だから、子どもの成長過程でさまざまな秩序や伝統、学力というものを身につける環境としてはそれほど悪くないのではないかと考えるのです。

そうは言うものの、それが平均的に新潟市全体にバランスよく成長しているかということ、かなり地域的にでこぼこがあって、連携がとれている地域というのはわりと利便性の高い地域で、どちらかということ、保護者の平均的所得が高くて、わりと保護者の平均的所得が低いといわれている地域は、わりと教育力が崩壊とまではいきませんが、難しい状況になっているということは指摘できるというのは、前回の調査から読み取れる部分であったと思います。

もう一つ、これは学校教育の先生たちでないと分からないのですけれども、親が昼も夜も働いている一人親家庭のケアの問題をどうするかということや、そういう問題意識も多分あったのだろうと思うのです。子どもたちが家庭の教育力を考えるときに、単に親からだけ教育を受けていくというだけでは不十分であって、地域や企業全体で子どもたちを支えるシステムがどのくらいよくできているかという調査をする必要があったと理解しています。

ほかにいかがでしょうか。

(新藤委員)

最初の、ただいま話題に出ていた「親を教えるのが地域」ということですが、今回、私は村上で発表させていただいたのですけれども、親を教える、親のレベルが低いという現実から、例えば9時に寝る子どもの親は、9時に寝る子どものことを早く寝ていると思っているのかどうかと。一方で、10時、11時に寝る子どもの親は、10時、11時に寝る時間を遅いと認識しているのかという、新潟市育成協のアンケート調査で、9時に寝る子の親も、11時に寝る子の親も普通だと思っている親が半分いたと。ですから、親の価値観が子どもの生活習慣にそのままついているということで、親に子育ての基本を教えていく必要があるのではないかという危機感があって、それに対して、地域で何ができるのかということで提案させていただきました。

その一方で、地域の中に子どもがいるおかげで親として地域の皆さんにお世話になる。表現がいかどうか分かりませんが、独身の皆さんで子どもがいなくて、地域の皆さんとかかわる機会というのはほとんどなくなってしまうのです。40歳、50歳になっても地域の皆さんとは何も接触がなかったと。一方で、子ども育てる中で地域の皆さんにお世話になって、結果として、逆に地域の中でいろいろな役割を任されて、大人として育っていくという大変ですけども、そういうこともあると思いますので、その辺もあって、親の現状、周りが子育てを任せられるのかという目で見ているのかという部分もあるのではないかと感じています。

(相庭議長)

ありがとうございました。

それはすごくリアリティがある感覚ですね。私などは絶対にそう思います。子どもがいなかったら、まず地域には根づかなかったし、恐らく新潟市役所には一步も入らなかったと思います。ところが、子どもができて、私の場合は女房が単身赴任で京都に行ってしまったから、私が一人で小さいときから面倒を見ました。保育園の保護者会の会長をやり、PTA会長を8年やり、その他さまざまな地域にまで、市役所の職員の方々、社会教育主事講習で参加した方々以外に知り合いがいっぱいでき、今どうなっているかという、地域と癒着して生きています。

地域と結びつくなんていうあまいものではないです。マンションをはじめ半径100メートル以内だと子どもたちの顔を80パーセントくらいは分かります。小学校を卒業した子は分かりませんが、小学校3年から上くらいは、向こうも分かりますし、相庭のおやじだという感じですから、そういうふうにかかわりますと、非行化して、バイクで問題になった子がうちのマンションにいたのでですけども、夜にわーんと鳴らして、もう頭にきたと思って、「うるさい、この野郎」と言っても、「おやじだ」と言って、それで通るのです。「夜中は静かにするんだよ」と。「そうじゃないと、突き出すところに突き出すぞ」と言っても言うことを聞いてくれるわけです。そういう形で、近いのです。

隣のおじさんやおばさんも分かるし、ごみ出しのときも分かるし、ビールの缶なども違うところに置いて、見つからなければいいやと言って出すと、「相庭さん、だれが見てるか分からないんだから、早くしまいなさい」、「すみません」とか、そういう形で、相互監視体制がファシズムだと言われればそうかもしれませんけれども、そういう中に入ると地域がよく見えてくる。地域が見えてくるというのも、私個人の体験ですけども、完全に子育てです。本当にそう思います。先ほど新藤委員がおっしゃられたように、親が地域を学習するというのは、本当にそのとおりだと感じています。

ただ、そのときに、私の実感で、データも何もないのですけれども、実感として言えるのは、子ども同士が仲の悪い親は親同士も仲が悪くなります。子ども同士が仲の良い親も、親同士が仲良くなるとはかぎりません。もう一つは、学校、保育所の役員をするときに、押しつけあいをするのですが、おしつけあいをやっておしつけた人は、おしつけられた人の心配をするということをしなないと人間関係が悪くなります。ここが極めて重要なポイントで、あるときにおしつけられて、困ったなと思って、助けてくれよというときに、おしつけた仲間たちがいると、必ず助けてもらえて、お

第29期新潟市社会教育委員会議

しつけられた人は、一生懸命やっているのだから、その人の意見を尊重するように、大事にしていると、活動は長続きます。これは私の実感です。

今回、調査したときに、団体調査の最後のほうに、うまくいっているかと聞く質問がありますが、子どもの活動をする組織がうまくいくのです。なぜかというのはまだ分からないのですけれども。もう一つは、子どもの活動を支援したり、PTAをやると、自分の子どものことを親は話したがるのです。悪くもいいし、よくもいいしで。それを聞いてあげるような人がいるといいのではないのでしょうか。新藤委員が調査をしてやってくれた結論を先ほど聞きましたが、全くずれていませんね。ほかにいかがでしょうか。

(伊藤委員)

今のように自ら体験するとよいというお話だったのですけれども、私自身の現在進行形の地域の子どもの状況で、一つ思ったのは、家の前が公園なのですけれども、中学生ないしはそれ以上の子どもたちが、日没が早くなったのですが、夜の8時くらいまでいるという状況が続いていました。どうなのだろうということで、町内会長さんや駅の交番の所長さんなどつながって、子どもたちが心配だからということで、どうなのだろうと思っているのですが、公園のお手洗いを洗うという活動を会長さんがされていて、あるとき子どもたちに声をかけたら、違う地域の子どもさん同士の集まりだったのです。つまり、情報化社会なので、調査で表れてきていないものとしては、親の知らない子どもたちの世界が現在あると。ずっと来ている子もいるし、違う人たちも来るし、最初は同窓会かなと、軽い気持ちで思っていましたけれども、結論とすると、人のつながりが、昔の子どもたちであった私たちとは違う仕組みがあるのだなと。

知らない者同士、知らない場所で落ちあって、夜遅くまで友達の疑似体験ではないですけれども、本当の友達になっていたり、別場所で楽しいことをしているのか、悪いことをしているのか分かりませんが、子どもたちの姿を見ていないと、調査にもありましたけれども、見えている子どもたちの姿も、私も実は分かっていたのだろうかという経験をしたものですから、それを含めて、親だけでは支えきれないご家庭があるとしたら、見えていない時間の子どもの行動の一つだったのかなと想像したのです。

その子どもたちも親になっていくのだと考えたときに、そういう親になっていく若い人たちも、私は社会教育という中の一緒の仲間になりたいので、そのための投げかけとか、子どもの姿が本当は見えていないのかもしれないということを考えなければいけないということからすると、地域の教育力が下がってきていると簡単に書くと失礼かなと思ったりしてくるので、逆に、地域の教育力がより充実するための課題解決のためということで、そういう人たちの目線で、一緒の仲間になれるようないろいろな取り組みとか、難しいですけれども、即効性のある肥料というのはなかなかないのですが、そういう人たちも、親子ではないのだけれども、地域の人として仲間になれるような方向を感じたいものですから、一人親家庭とか、子どもさんを取り巻く家庭の状況など、市民として分からない人もいるし、分かる人もいるので、その辺は表現していただいて、だからこそというふうにしていただきたいと思います。

(相庭議長)

伊藤委員から出てきたのですけれども、親が知らない世界というものをどうとらえるかというのは難しいですね。私の考えなのですけれども、子どもたちというのは親が分からない世界を作っていくことで成人していきますので、それを地域が全部分かってしまって、どこにだれがいるか分かる、だから健全育成だといえない部分があるわけです。社会教育的な子育てへのアプローチということを見ると、子どもたちのすべてを理解するというのではなくて、子どもたちが、健全という言葉はおかしい話なのですけれども、成長していくうえで、自分を確実に確立できていくような環境を作っていくということなのだろうと、伊藤委員の話を聞いたのです。

(伊藤委員)

私的には、子どもがやれるような社会でありたいという気持ちなのです。そういう環境であった

第29期新潟市社会教育委員会議

らしいなということです。そこで、ブランコをこいでいても私はいいと思うので、子どもやっているのだなというのは、私は微笑ましく思うのです。見守りたいと思っています。

(相庭議長)

ほかにいかがでしょうか。

(新藤委員)

今、経済的に子育てが大変かなというご意見らしいものが目についたのですけれども、私事ですみませんが、実は某金融機関に勤務してまして、10年以上前というのは正月、元旦明けの業務というのは子どもでゴった返したのです。お年玉をもらった子どもがまず貯金するために本当に忙しかったのです。貯金箱を何箱も買って用意しても、途中でなくなるくらいだったのですけれども、この五、六年、全く寄りつきません。多分、お年玉は相当高額をもらっているのではないかと思うのです。先ほどの価値観に戻りますけれども、前は小遣いをもらって、まず貯金して、本当に必要なものがあつたらそのとき使いなさないという基本的な子育てだったと思うのですが、今は、大金をつかんだのだから、ほしいものを買うということで、どちらからというと、大型ショッピングセンターあたりに走っていく時代になったのかなと。これは10年前と今ではまるで景色が違います。将来の貯蓄に対する、多分、子どもより親の感覚が変わってしまったのかなと。それはものすごく極端に出ています。

(相庭議長)

それはそうですね。高額商品になっていると思います。深刻な問題ですね。小学校3年、4年生くらいから額が上がりますよね。ファミコンではなくて、コンピュータ関係のソフトですね。

(新藤委員)

おもちゃも高額になりましたから。

(生涯学習課長)

この会議の中で、団体調査を進めるにあたって、どうしても企業というのは大事な存在ではないかと考えてきました。そこで、予備調査を行ってみたら、企業の果たす役割は大きいはずなのに、そんなに動いている企業はなかったということで、訪問調査に変えたわけですが、本当にそれでよかったのかなということを思うわけです。企業というものも今後の可能性とか、今の課題とかというものをもう少し整理してみようと思うのですが、委員の皆さんは具体的に企業を訪問された感触からご意見をいただければありがたいと思います。

(相庭議長)

いかがでしょうか。今の玉木課長からのお話なのですが。

(西田委員)

私は新津の原常樹園に行ったのですけれども、感覚としては、今、森のようちえんということでやっけいらっしやって、本業ではないわけです。その部分で頑張っけいらっしやるというのが、ようちえんに通わせる親がいますし、そういう関係者がどんどん増えていくと思っけいますけれども、造園業に直接何かメリットがあるかという、そんなことはなく、稀だと思っけいます。そういう考え方という、地域にどんどん経済的には落ちていくわけですが、その中で地域に何か役立つようなことをやっけいているというのは、長期的に非常に重要なことで、それは中小企業ほどシビアで重要になってくると思っけいます。実際に儲かるまでにはスパンが長いので、投資から回収まではかかるので、なかなか取り組めないのであるけれども、そういう部分をやっけいらっしやることを積極的に取り上げたり、そういうところをアピールしていく必要はあるのではないかと思っけいます。非常に重要な役割だと思っけいます。企業にとつても重要だし、こちら側にとつても、全国大会で見つきた事例もそうですが、やはり企業協賛をもらっけやっけいているところもありますので、そのような視点で何か入れられないかと思っけいます。

(相庭議長)

ほかにいかがでしょうか。

(南委員)

私自身はコマスマーケティングさんに伺いましたけれども、そのときに感じたのは、本業に非常に近いといえますか、仕事とこの活動がうまくかみ合っているということは感じました。それと同時に、ほかのところのものも拝見してみると、志があって、その地域に根ざすことの意味を、子どもにかかわっていることによって、企業としての役割、信頼性や信用といったものがすごく大きくなるのだろうという部分もあるし、そのかわり、それと相まって、非常に負担も大きいでしょうし、そういう覚悟を持った企業というのは相当クローズアップして、皆さんにも広くPRすることが必要だろうということが一つです。

これは当社もやっていることなのでご紹介すると、私どもは「キッズプロジェクト」ということで、次年度が10周年になります。毎年、協賛企業さんを集めて、それは年ごとに数などがいろいろとあるのです。特に今年などは震災の影響もあって、額的にも厳しいところもございましたけれども、その中でもいろいろな活動をして、例えば水害に遭って図書館が流されたようなところに本をプレゼントするとか、読み聞かせをするとかということもしているのですけれども、協賛企業さん自体が資金的にバックアップする以外に、直接、皆さんがやることという、イベントのときに参加していただくようなことで、皆さんの力をお借りしてやるというのが今の実態です。よほど大きな企業で、社員のにも余裕があるところでない、特に今の時代は、人材や社員の数そのものを減らしてきていますから、前以上に、この時間をこういうふうにしていきなさいというには、厳しい条件が各所で見られます。

そういう中で、少なくとも、イベントのときには参加しましょうとか、やれることのハードルといえますか、金額もそうなのですけれども、年に1回だけ参加するとか、ハードルが低いところから協力していただくようなことも大事なことで、参加した方はお子さんが非常に喜んでいて、大変やりがいとか、たった二日くらいであっても感じてくださっていると私も思っているのです。そういう意味でいうと、細くてもずっとやっていくことと、一生懸命やっている方のことを検証することと、ハードルを下げて、少しずつお試しでもいいから、企業の方に体験していただくような場を作っていくということもいいことなのではないかと思えます。

(中村委員)

企業によって取り組みがさまざま、それをやることによって自分たちも潤うという団体の取り組みもあるし、原常樹園さんのように、今は見えないのだけれども、これがやがて造園業の活性化につながっていくのだという強い信念のもとに、どちらかという、けっこう無理をしながら熱い志のもとに続けているというところと、いろいろあって、大企業のキッズキッチンさんなどは、逆に協賛の会員企業は特色を出さないと。むしろ特色を消し去って、維持できるシステムをどう作っていくかということが課題だったし、小さい体力のないところはなかなかできないと。そこで、どういことができるかという中で提案があった一つとして、評価される仕組みをつくってほしいと。例えば土木業や、ある分野ではそれが業績として評価されるのがあると聞いたのですが、社会貢献したからといって、だれからも評価されない、認知もされないという、そこら辺のところをもう少し転換する必要があるのではないかということが意見として出されていました。

もう一つなのですけれども、今、子どもということで話が進んでいますけれども、先ほど言われたように、独身の人たちは地域にかかわることがないという話が出ていて、今日、たまたまテレビを見ていたら、60歳代の男の人が自転車の乗り方が悪くて、横断しようとしたら、車のほうがそれを避けようとして二人をひいてしまったと。そうしたら、車のほうに罪が科されないで、自転車の無謀運転をしたほうが禁錮2年を受けたということがあったのです。親というよりも、大人全体をターゲットにしていくということがすごく大事なだろう

そうしたときに、ほかの取り組みの中でおっしゃっていたのは、例えばよろずやさん、若者とお年寄りをつなげる場所を作っていくとか、農作物と作っている人と売る人をつなげていくとか、子どもだけではない、もっと広い視野のものを考えていく必要があるかなと。三井物産さんなどは、

第29期新潟市社会教育委員会議

実際にやっているのはキッズキッチンなのだけれども、ただアイデアとして、それがほかのところにシステムとして回っていく、今はこれで手一杯で、ほかには手がかけられないのだけれども、かけられるならば、団塊の世代の人たちのプログラムとかということもおっしゃっていたので、大人向けにできるというか、子どもだけではない、もっと幅広い意味での取り組みを考えられるということと、やったことによつていかにメリットが生まれるのか。メリットのことはここに書きましたけれども、人間関係だったり、いろいろなメリットのつけ方があると。付加価値はいろいろあると思うのです。企業自体が評価されるというもの、それによって自分たちも活性化していくということと、そこら辺のところの、特色によつてメリットのつけ方が違うというところで、こういうメリットがあるということをお話していく必要があるのではないかと気がします。

まず対象を広げる。例えば学校支援ボランティアというのではなくて、本当は地域支援ボランティアなのではないかと。学校支援というと、学校の子どもたちや先生を支援するようで、なぜ私たちがしなければいけないのかではなくて、学校に来てかわることによつて、地域、私たちが支援される側にもなるのだという、概念を広げる必要があるのではないかと、いろいろな方の話を聞いていて思いました。

もう一つは、困っている家庭について、どこかに困っている感を訴えられる人というのはまだいいのです。どこに行つていいかわからない、困っているのだけれども、どうしようもないといつて抱えて込んでいる人たちが、ここに行けば何かにつないでもらえるみたいな部分と、やはり層が必要なのだと思うのです。

(生涯学習課長)

今、地域支援ボランティアという話もありましたけれども、例えば企業での活動や、地域での活動などがあるわけです。それはそれぞれ別々で行われるのではなくて、それを結びつける組織や人が必要だというお話です。場も必要だと。それを結びつけるにはどうしたらいいのか。結びつけるにはどういう存在が必要なのでしょうか。

(中村委員)

議長と話をしていたのですけれども、私も自分で書いておきながら、全然書ききれていないのにしゃべつて申し訳ないのですが、これは下書きの下書きなので、下書きくらいときにはもう少し出したいと思います。

一つ思ったのは、場をつないでいくタイプ。よろずやさん、原常樹園さんもそうですね、場をつないでいくというタイプとネットワークというシステムでつないでいくトキっ子くらぶであるとか、三井物産などはシステムでつないでいくのです。資源の使い方が違うという感じがします。人もそうだと思います。インストラクターを育成して、インストラクター同士がつながっていくということもあります。

(相庭議長)

ほかにありますか。

(板垣委員)

学校の立場で、今、企業というのが出ましたので、学校と企業を結びつけてみてください。何か結びつきますか。

(伊藤委員)

職場体験。

(板垣委員)

そうなのです。中学生ですと職場体験。企業の人に来て、学校で授業をしたり、お話をしたりしてください。これくらいなのです。それを結びつけているのが今のコーディネーターなのです。つながりを作る、結びつきを作る、ここがポイントになってくるので、そこは共通していると感じたものですから、一言だけ申し上げました。

(相庭議長)

第29期新潟市社会教育委員会議

ありがとうございます。

ほかにいかがでしょうか。

(川上委員)

私もその立場で言わせていただくと、私たちのように学校に配属されているコーディネーターと、今、西区、西蒲区で養成中のコミュニティコーディネーターを育成中と聞いていますけれども、そのあたりのこれからの連携のとり方、お互いの情報の共有化というのでしょうか、そういったものがこれから大事な一つのポイントになってくるのではないかと考えているのです。今、西区と西蒲区で行われているコーディネーター研修がどの程度なのか私も情報を持っていないので、情報があつたら教えていただければありがたいです。

(西田委員)

これからだと思います。うちはもう来ましたけれども、まだこれからです。

(川上委員)

始まったばかりですか。

(中央公民館長)

コミュニティコーディネーター育成講座については、おっしゃるように、今年度は西蒲区と西区でモデル実施という形でスタートしています。7月25日にキックオフフォーラムということで旗揚げをやったのですが、具体的には後期からスタートしておりまして、進んでいるのは西蒲区のほうです。西区はどちらかというと少し遅れています。具体的な手法は、区によって少し違っていると。どちらが正しいとは言えないと。あくまでもモデルでございます。西蒲区の取り組み方としては、公民館と社会福祉協議会が合体するような形で講座をスタートしています。西蒲区は地域特性に着目したわけですが、西蒲区の地域には高齢者の一人世帯、一人暮らしのお年寄りだとか、老老介護の家庭が多いということで、そういった世帯に対し何らかの声をかけていく、高齢者見守り隊という表現で、そういったものを結成していくような流れで、目標をまずそこに定めて、そこからスタートしようと。

超高齢社会をにらんで、西蒲区としてはこれは第一の地域課題ということで、西蒲区といっても、合併市町村がけっこう多いですので、それは巻だけではなくて、どこの出張所の範囲内でも目が届くということで、各地区持ち回りで、トータルで一つの講座と。初回はこの前あったということです。初回は68名にお集まりいただきました。そういった方々が次回、また次回と会場を変えて集まる中で成果を発表していただくようなシステムで、仮なのだけでも、登録制度にもっていこうという動きになっています。

西区のほうは、もう少し大風呂敷を広げていまして、市と市民の協働とは何かということから、自治基本条例から学んでいこうということで、計画が壮大で、3年計画でやると。西区は社会福祉協議会ではなくて、メインは区役所と公民館と一緒にやっていこうという動きで、動き自体は別々なのですが、そういった形で動いています。

コミュニティコーディネーターになっていただく方のターゲットとしては、コミュニティ協議会の実働部隊だとか、地域教育コーディネーターやPTAの実働部隊をターゲットにすると。つまり、すでに地域で活動している人たちに集まっていただいて、つくりとしては、地域教育コーディネーターのスタイルに学んでいくという部分もありますが、コミュニティコーディネーターというのは一体何だろうという、そこからスタートするような、今、動き始めて、やってみてどうかという流れになっています。今、2区でスタートしましたが、来年度は全8区でやってみようという流れです。

(相庭議長)

よろしいでしょうか。地域教育コーディネーター、地域コミュニケーターみたいな立場の人と話すすごくおもしろくて、そこまではすごくいい話だと思って聞いていました。社会教育の場面というのは、現場と教育との決定的違いというのは、社会教育というのはシミュレーションの世界な

第29期新潟市社会教育委員会議

のです。これが実現できるかどうかは別にして、こういうものを作ってみるという練習をする機会なわけです。例えば語学であれば、英語をしゃべるのは、英語の力をつけるために英語を使うのです。実際はその人が学習したものをどこで使うかは別な話なのです。

その視点で、今までの話や、新潟市、日本の行政も一般的にそうなのですが、あるプランを作ると、必ず行政は実行しなければいけない。ですから、プランを作るまでに、これはできるかできないかだけを峻別するから、当然、委員会は専門家の人たちが集まって、確実にできる、予算もつくようなものを作ってくると。そういうことに私たちの国というのは慣れてしまっているのです。予算がつくかどうかの議論が先で、その次に、確実にできるような人たちを集めて、だれからも文句を言われなような、のっぺりした、特色のないものを作る。これが日本のやり方なのです。

ところが今、マーケットはグローバル化してしまっていて、私の社会教育的感覚からすると、例えば新潟市を活性化するためにはどうしたらいいか。これは、中学生の総合の教材になり得ると思うのです。例えば新潟市のお米を中国市場に売りたいという人がいました。あなたは新潟市の市長です。どうしたらこのこしひかりを売りさばけるかシミュレーションしてくださいと。これは立派に総合の学習になります。赤字垂れ流しの新潟空港があります。この新潟空港を黒字に転換し、新潟の温泉宿と新潟の伝統文化をネタに国際都市にあげたいと思います。あなたたちはどういうプランを持ったらこれができるようになりますかと。これがある意味、教育の論理なわけです。

そういうように考えると、地域コーディネーターを考えていくときに、集まってもらって予算をつけて、人、組織を作っていくというのはすごく大事なことで、家でいうと土台になるのだと思うのです。基礎工事になると。ところが、その先にどのような家が建つかという設計図がないと、集まってもらっても、おれたちは基礎をやったけれども、ところで洋風にするのか、和風にするのか、堅穴式住居にするのか、よく分からない部分があるわけです。そうすると、そこのところを埋めていくためには、ある意味、ものすごく無責任な、こういう言い方をするとまずいのですけれども、私は市民運動にけっこうかかわるものですから、無責任な参加の仕方、つまり、おれならこうする、おれならこうするという案を出しあって作っていくコンテストみたいなものを作って、採用するかどうかというのは別にして、できたものはどのくらい実効性があるものなのかどうなのかというのは、各地域の、例えば西区なら西区、東区なら東区でいろいろな案が出てくると。ちょうど自由民権運動のころの憲法プランのようにさまざまなものが飛び出してくるような関係をつくっていくことのほうが、行政を組織としてつくってことも大事なわけけれども、そこと並行していかないとうまくいかないのではないかと思うのです。

コミュニティ協議会をやっていて、私もPTA会長をかじったのですけれども、あるとき会議があって、市役所からやれと言われたからやったのだと。集まってくる若手の連中というのは何をやるのだという話になるわけです。こんなものをつくって何をやるのだと。肩書きに書けるとか、名刺に書けるとか、みんな喜んでいましたけれども、何の役にも立たないと。何するのですか。自由なことを言ってもらっていいと。自由なことと言ってもねと。そうすると、よく知っている人が出てきて、役所の予算というのはこうだと言って、行政の論理をそのまま展開するわけです。そうすると、次の会合で出席率が2割くらいになるのです。決まった枠に入るような会合ではなくて、もっと自由に発言できるような関係を作っていくというものと両方で回していったほうがいいのではないかというイメージを持っています。

先ほどからずっと話を聞いていて、社会教育が学校をモデルにするということは、社会教育の禁じ手ではあるのですが、先ほどの板垣委員のお話を聞いていると、学校教育で子どもたちが企業に行って知識を得てくると。例えば新潟の東港に行って、横浜港に負けないような貿易港にするにはどうしたらいいのだということを調べてみると。そうすると、子どもたちからすれば、貿易のお金が幾ら出ているのだろうという話になって、何を運んだらいいか、だれが必要なのだという話になって、港湾設備だと。ところが新潟市は金がないのだという話になってきますから、そうすると、社会教育の場も、自由でおもしろそうな、そこに参加したら何かおもしろいことがあるのだ

第29期新潟市社会教育委員会議

ということを書いて出ないと難しいのではないかと感じています。

私たちは企業との関係で、企業がいろいろな夢を語れるようなものを、社会教育委員としては後押しすると。どこまで役所なり行政がかかわれるのか難しいかもしれませんが、けれども、けれども企業は市民に夢をわたす、それを私たちは引き出したいというスタンスで書いてもらおうといいのかもしれませんが。先ほどからずっと話が出ていたので、それを感じました。

(西田委員)

今のお話なのですけれども、やはり企業は道徳でやれないと思うのです。では何でやるのだと思ったら、カッコいいからやるというか、そういう価値観の転換に対して憧れを抱いて、好きになってというような、周りから指示されるようになる、判をつけるということになるかと思うのですけれども、道徳でやらなければいけないということではやれないし、やったとしても続かないと思うので、すごくあいまいな言い方しかできないのですけれども、総合フードの長嶋社長の話を聞いていて、純粹にかっこいいなと思うのです。あれは全部補助事業で、人件費は全部緊急雇用対策のお金が出ているので、今までは全く懐は傷めていないのですけれども、来年からは分からないのですけれども、確実に地域に対して何かアプローチをして、若者がそこにいたり、おばあちゃんは大学生と話し込んで楽しんでいたりするので、そういうものにかっこいいなと思えるようなものを後押しできればいいなと思いました。

(相庭議長)

それは多分評価だと思うのです。一生懸命やって夢を出してくれる企業には社会的に評価出していくという、そういう視点も必要なのかもしれません。

(新藤委員)

そこまでいく一歩手前かと思うのですけれども、例えば地域でPTAなどがミニバスの大会などのときには、必ずプログラムを作って、そこに企業広告が載るのです。あれはかなりスタッフの皆さんが難儀して寄付を集めて回ったと思うのですが、寄付の額によって字の大きさが違うわけです。あれを何年か続けて見ていくと、毎回協力してくれているところの社長たちなどは、その後、いろいろな形で理解してくださるので、金がないということで、いろいろとかかわりを持っていく中で、実際に企業のほうでいろいろな形で応援してくれるように視点が変わっていくという部分もあると思いますので、親として地域に働きかける一つの努力として、企業のほうで新たな価値観みたいなものを見つけてもらえる、そんな大げさなところまではいかないのですけれども、しょうがないのでポケットマネーを出してくださるような方たちは、そのほかにも、何か頼まれたら、しょうがない、やってもいいよと言ってくださる会社なり、大人になっていただけるのではないかと、皆さんのお話を聞いていて思いました。

(伊藤委員)

私的な絵に描いた餅プランなのですが、新潟ふれあいマイスタークラブみたいな感じで、知の循環型社会をこの前勉強してきたときに、公民館などではいろいろと取り組みをしていますけれども、そこで学んだ人たちに別の場で活躍していただくという仕組みづくりができないか考えたのですけれども、例えば図書館だったら、今、ブックスタート事業をやっていますけれども、絵本の取り組みをした人に活躍し始めてもらっているということだと思います。体育館でしたら、生涯スポーツについて、学校のマラソン大会への貢献とか、学生派遣などを実際にやって、みんなフォームがよくなっているのを見たりしているので、地域で学ぶ人たちも含めて、活躍のビジネスチャンスは大いにあるのではないかと考えています。

そんなときに、一人一人の市民の皆さんが学んだり、学んだもので活躍する場というときに、企業の方たちにも、その人たちがマナーや人権を勉強する単位もあっていいと思いますが、企業の協力も得て、キッズキッチンではないですが、企業でそういった養成講座など、本物志向の、学ぶときに企業に協力をいただく。企業に協力いただいたら、協力企業三つ星みたいなご褒美というか、先ほどから出ているメリットというか、企業にとっても地域貢献している、役立つ喜びというもの

第29期新潟市社会教育委員会議

を、ぼんやりとした道徳やハートだけではなくて、企業をもっと褒めるような仕組みになっていてもらいたいと思うのですけれども、まず、市民目線の一人一人の活動を生かすために、企業も巻き込むという言葉が悪いですが、いろいろな取り組みをしているものが続くように、その活動がほかの地域にも広がるようにということは、やはり考えていったほうがいいのではないかと思います。

(相庭議長)

日本の企業というのは、私は外国からしか見ていないのですけれども、東アジアなどで見ていると、人間関係を作るのが極めて下手です。日本企業というのはものすごく下手です。びっくりするのは、例えば大企業にしてもアジア市場に出るのが遅くなったりしますね。いろいろと言われてはいますが、フロントに立っている人間たちの他社をつかまえるタイミングというか、場を作るのが下手で、すぐに成果が出ないとまずいというのがうちの国の特色ですよ。だから、少しでも早くとあせるのです。ところが、ヨーロッパ系の連中やアメリカの連中というのを見ていると、私たちから見るとすごく無駄なことなのではあるけれども、実はそれがものすごく大事なことで、ものすごく無駄なようなことをやっているようなものだけれども、実は成立してしまっているのです。

例えば宴会の仕方一つとってみても全く違って、ドアから入ってくる時と違って、日本の人が入ってくる時というのは、本当に緊張して、静かに入ってくるのです。ほかの国の連中というのはパーティーをやるということ、「イエー」と言って入ってきますから、スタートからして違って、うちの国は、遅く入ってきて、脇に座るのです。向こうの連中というのは、先に入ってきて脇に座るのです。ほかの連中は遅く「イエー」と言って入ってきて、「おれの席はそこじゃなかったのか」と言って入るわけです。だから、入ってきたときのイメージが全く違うわけです。いつもいろいろなことを語りかけて、黙っている人はずっと脇に来て話しかけると。日本人というのは話しかけられるのを口を開けて待っているのです。

それは、地域社会の中で企業の人たちが持っている文化というか、大企業伝統みたいなものがあるって、バッジが大企業だったら寄ってくるとか、そういう伝統みたいな中に私たちはいるものだから、ものすごく下手で、それは社会教育ではないのですけれども、社会とのふれあいというものをあまりやっていなかったということで、ものすごくマイナスな部分が出ているような気がして聞いていたのです。先ほどおっしゃったように、社会教育というのは企業のためにはないのですが、企業はメリットなんか出てきませんけれども、だけれども、かかわるということがものすごくメリットなのだとすることを、企業の担当者にも学習してもらえようことを考えていく必要があるのだらうと思うのです。

私たちの社会というのは、同一文化圏ですから、同じ経験を踏んでいますし、同じことをするのが得意ですから、テレビのチャンネルがそうですよね。どこを開いても同じものを行っているわけです。出てくる人もみんな同じ人で、どこを見てもほとんど変わらない。そういう中にいますと、そこからずれたことに対する挫折感みたいなものが出てしまって、ずれないように考えると。ところが、ほかの国というのは、ずれるように動いていくのです。その違いというのは学習しないとできなくて、企業の人たちが、本当はほしいくらいのパワーだと思ってしまうので、そういうことを社会教育の場に出てきてもらうことで、メリットがあるのだと。そういうことを打ち出していくような組織が今後いるのだと思うのです。

今まで社会教育は行政がやり、もちろん無料で、市民の道徳的、文化的な知識を高めていくのが私たちの仕事でした。日本国憲法に求められて、その後、教育基本法に書かれている人材育成というのは社会教育の基本です。それは間違いないのですが、そういう杓子定規なことをそのとおりにやっていても、本当に社会教育が今後の21世紀後半を救っていただけるのだろうかと思うと、難しいような気がします。そういう意味では企業との関係は非常に重要な問題で、先ほど議論されているような、企業との関係が大事だということを思い切って書いてもらったほうがいいのではないかと思います。

(笠原委員)

第29期新潟市社会教育委員会議

福祉の分野に比べると社会教育が求めているものが、企業にはわかりにくいのではないかと考えています。社会教育で地域貢献活動をする際には役所がバックについていることが多いですが、福祉の分野では、これがやりたいというのがあって自主グループを立ち上げるところがほとんどです。資金調達から全て自分たちでやらなければならない。そうすると、こういうことをやりたいからこういう支援がほしいとアピールしますから、企業の理解も得やすいのではないかと考えています。社会教育で道徳的なことをやってほしいとか、地域の文化の発展に協力してほしいといわれても、どんなかわり方があるのかということが企業にはわかりにくいのではないのでしょうか。

(相庭議長)

はっきり言えば、プランが見えにくいということですね。

(笠原委員)

何か求めるときというのは、きちんとビジョンのようなものを示す必要があると思っています。

(西田委員)

そうなのです。良くも悪くも、企業は目的に最適化することで費用を出しているのです、その考え方がまさに今の問題を生んでいるのだと思うのです。目的に対して、飲み会や運動会をやってもしょうがないみたいな、じゃあ運動会をやめようと。それでコミュニケーションがとれなくなって、逆に売上げの目的が達成されないという現状になっているので、その部分は非常に難しいと思うのですけれども、何のためにやるのかというのは、もちろん考え方の基本ではあるのですけれども、それを追求すると、メリットがなければやれないのかみたいな話になっていくので。

(笠原委員)

目に見えるメリットだけではないと思うのです。企業評価であるとか、イメージとかというものもあるし、企業の人の気持ちを動かすみたいな部分もあると思うのです。評価というのは業績うんぬんだけではかれるものでもないし、社員がかかわっていることが企業にも伝わって、企業そのものを動かしているような事例もあるわけです。

(生涯学習課長)

企業についての提案を3章のところでしたいただくなりかと思いますが、それはまたお考えいただいて、アイデアなり方策なりをもう1回話しあわせていただくことにして、私からもう一つお願いしてもいいのでしょうか。

(相庭議長)

どうぞ。

(生涯学習課長)

地域教育コーディネーターさんが地域の中で活動していらっしゃるんですが、先日、川上委員のところにおじゃまして、中之口東小学校なのですけれども、地域のさまざまな財産、例えば自治会であったり、農家の方であったり、美容師さんであったり、多くの方たちが学校の文化祭に集まってこられたのです。それを仕掛けられたのはコーディネーターさんでいらっしゃるのですけれども、村中の人たちが集まるということを体感してきました。学校があって、コーディネーターさんという人がいて、支援ボランティアさんもいたのでしょうけれども、地域全体で動き子どもにかかわる活動をされているということが、コーディネーターさんが誕生することによってできてきているわけです。そのことを評価しながら、これからの社会教育はどうあればいいのかと思うのです。コミュニティコーディネーターの話もありましたけれども、その辺のご意見をいただけないかと思っております。

(相庭議長)

今の点についていかがでしょうか。全校配置ですか。

(梅津委員)

平成26年までに行います。

(新藤委員)

第29期新潟市社会教育委員会議

私の地元は100名をきる小学校があるのですけれども、そこにコーディネーターが配置されて、子どもが100名をきるということは、PTAも減っているわけです。学校の花壇の手入れや校門前の除草などというものが全く間に合わない状態だったので、地域の皆さんにお願いして、草取りボランティアで、1週間に1回、朝6時に集合して、朝食前にみんなで草取りをします。ときどきコーディネーター室に集まって反省会と称してお茶を飲む。そういった人たちが事あるたびに学校へ来るので、子どもたちといろいろな形で交流を持って、本来、お孫さんもいないとか、若い人たちとは別に住んでいるという形で、子どもたちと接する機会のない地域の人たちが、どうせ時間があるからいいですよということで集まれる時間でいろいろとやっただけで、そういったものが始まっているので、そういった意味で、地域のいろいろな人材なりを活用しているのではないかと思います。非常にどちらもいいことかなと感じています。

(相庭議長)

学校側から見て、どうですか。

(梅津委員)

地域教育コーディネーターの話が出ましたが、今、小中合わせて171校あるうち、139校にコーディネーターが配置されていて、コーディネーターの数は202名います。私のところの入舟小学校のコーディネーターは一人なのですけれども、その一人の活躍のおかげで、5年目なのですけれども、先ほど新藤委員が言われたように、地域の方、保護者の「絆ルーム」という部屋にいつもだれかが来て話をし、自由にお湯を沸かしてお茶を飲み、子どもとのかかわりを持っています。地域の方たちの中で、学校はすごく敷居が高いと言っていた人が、敷居が低くなって来やすくなったし、子どもにとっても、年を取った方、保護者の方にとっても、お互いにお互いのいいところを見せ合いながら、どんどん学んでいっているという感じがしています。

今回、入舟小学校では人権教育の文部科学省の指定を受けて、研究発表会をやりました。そのときに、約500人が集まりましたけれども、学校の職員だけでは到底無理なところを、地域のボランティアさん、保護者のボランティアさん50人くらいが、駐車場の誘導などをやってくれて、まさしくこれからの姿を見たような気がしたのです。子どもは学校だけで、学校は勉強を教えたり社会性を伸ばしたり、個性を伸ばしたりするところだけれども、でも、ここだけではやっていけない。学校で人権教育ですよといってやっても、家に帰って、親があそこのうちの子と遊ぶなどと言ってしまえば、子どもはやはり親の言うことを聞いてしまいます。ですから、やはり地域と学校と家庭と一体になって共同作業をしていく核になるところが学校なのだろうと。

家庭教育といって花火を上げているのですが、それは本当に花火で終わってしまって、継続していかない。学校を核にしてだれかが寄り集まって、わいわい、がやがやして、子どもの教育のサポートに入ったりしている間に自分も学んでいっているということで、いろいろな姿も見られるし、非常に家庭教育にもなっているという気がして、これからは学校を核にした教育のコミュニティをしっかりと考えていくのが新潟市の方向なのではないかと思っております。

(相庭議長)

中学校はいかがですか。

(板垣委員)

大体同じような感じですが、学校だけでは子どもの教育はできません。私も入舟小学校の研究会に参加させていただきました。梅津先生、どうもお疲れまでした。あの参加者の数の多さ、それをさばく保護者、ボランティアの動きがすごかったです。あの人数をさばいたと。帰りなども混むかなと思ったら、きちんと計算されていて、すぐに出られる。地域の方がついて段取りしているのです。

(伊藤委員)

駐車を出るときに、グラウンドだから車のタイヤを洗ってやって出ていったとかということを知っていて、地域の方の協力はすごいですよね。

(板垣委員)

第29期新潟市社会教育委員会議

あれは学校の職員だけだったらお手上げですよ。

(梅津委員)

学校の職員だったらそこまで考えられないです。

(伊藤委員)

参加した人は喜んでいました。

(梅津委員)

地域の方がいろいろと心配してくれて、靴、傘がごちゃごちゃにならないようにする工夫もみんな地域の方たちがカードを作ってやってくれたのです。そういうふうにお互いにいいところを持ち寄りながら、お互いが高めあえるというのは、やはり学校はいい場所かなと思っています。

(相庭議長)

地域にパワーがあるのですね。何かやりたくて、かかわりたくてしょうがないのではないのでしょうか。それがたまたま引き金になってうまくいったという感じがしますね。恐らくほかの地域の人たちも、今はせちがらい世の中だから、何かきっかけがあれば、かかわりたいのだと思うのです。きっかけをどのように実際の力に引き出せるかというのは、地域コーディネーターの力量にかかっているのだろうなということを感じながら聞きました。

ほかにいかがでしょうか。

(生涯学習課長)

今、議長がおっしゃった地域教育コーディネーターさんの力量にかかりますけれども、社会教育の場合にはほかの役割を持つ人たち、担い手がいるわけです。地域の中に幅広い団体や活動の場があるわけで、コーディネーターさんだけで担いきれるのだろうかという疑問もあります。それぞれの団体や人がどうかかわっていけば社会教育としてうまくお互いに支えあっているような地域になっていくのかということ、皆さんから議論いただくは今日でなくてもいいのですけれども、そんな思いがあります。

(相庭議長)

これは実は難しい話で、学校を中心とした社会教育として置いてしまいますと、社会教育そのものの存在の基盤がなくなってしまうのです。社会教育の団体とすると考えれば、PTAがしっかりしているのであって、PTAというのはもともと、あれをなぜ社会教育団体として認知されているかということ、子育てと学校等がかかわりながら、自分が親として、保護者として成長していくという位置づけがあるから社会教育団体として認知されるわけです。何年前の地域があるところというのは、学校はPTAをつかむと地域がつかめたのです。地域という概念ではなくて、学校の先生たちと保護者ということによって面ができたのです。今はどういう状態になっているかということ、先生たちと保護者というのは線でつながっていて、面にならないのです。だからモンスターペアレントとかという、私はこの言い方は好きではないのですが、要するに意見の強い親が出てくるとなかなか難しくなるという形になっていて、その地域を、学校を地域の中にソフトランディングさせていくため地域コーディネーターが入ったのです。そのところがまた悩ましいところで、学校が中心だといつてやってしまうと、学校にかかわらない人たちの社会教育というのは崩れてしまうのです。

もう一つ忘れるといけないのは、子どもたちは学校で不登校とかいじめなどさまざまなトラブルを抱えます。今でも記憶に残っている事例の一つが、不登校の子どもなのですが、公民館で将棋なり囲碁なりを打つと、不登校を起きているときとおよそ違う顔を持ってそこに現れてくるわけです。恐らく学・社連携というものを違った形で考えると、例えば学校では自己主張が強く個性的な子で、先生が手を焼いているのだけれども、社会教育の現場では中心的な人物になれるというふうに、社会教育というのはその場面で子どもたちの活動の評価が違ってくるようなものであるべきだと私は考えるのです。

例えば学校目線で子どもたちをとらえていくと、遅刻をしないで、先生の言うことをよく聞いて、学業もそれなりにできる子であったほうがいいのかもかもしれません。しかし、社会教育的な視点で見

第29期新潟市社会教育委員会議

ると、普通の、平均的な人なのです。むしろ、社会教育的な視点で見れば、多少、性格がきつくて、一芸に秀でてくるような人たちが地域の文化や変わった地域の特色をつくっていくと。社会教育を引っ張っている人たちというのは、ある意味、変わったというと怒られますけれども、個性ある、特徴的な人が多いわけです。だから社会教育というのはおもしろい部分があって、その兼ね合いをきちんと考えていく必要があって、変わっているけれども地域を引っ張っているような人たちを学校との関係の中に取り込めるようになると、学校を取り込むのか、どちらがいいのか難しいですが、そうすると、コーディネーターは多分社会教育的に成功するのだらうと思います。

学校というのはある意味、学校の価値観からずれた人というのはとりにくいです。私は人権擁護委員もやっていますが、新潟市も長岡市もやっていますが、学校の先生たち、特に中学校や高校の先生が一番困っているのは、子どもの権利条約で、意見表明権、これを入れるかどうかで、学校の先生方はイエスとなかなか言いにくいのです。ところが、社会教育の先生は絶対に入れるとおすわけです。なぜなのかというと、意見表明権を入れたら、子どもたちの制服なんていうのは全部ノーですから。そういう話が出てくるわけです。自分の意見表明というのは服装の自由、頭髪の自由です。茶髪がいいんですから。

そうすると、学校からすると、社会教育で頭髪の自由なんて当たり前で、例えばロックバンドをやりたいと子どもたちからすれば、ロックバンドをやるための服装が必要なわけです。それが社会教育なので、そここの兼ね合いをどういうふうにとって、調和ある文化的な創造的な社会を考えていくかという分野なのです。そういう話があったので、申し訳ないのですが、進展はパスです。

(雲尾委員)

社会教育団体ということに関して、今、社会教育団体は自分たちのやりたいことを中心にやるわけで、目指すことは自分たちのやりたいことで、社会福祉の実現にしても何にしても、自分たちの団体の目指すところがあるわけです。新潟市の教育ビジョンを作るときに、生涯学習部会で、住みよい住みたい地域づくりという、「住みたい地域づくり」を入れてもらったわけですが、住みたい地域をつくるためにみんな活動していると。その住みたい地域というのは、昔は何となく重なり合っている部分もあって、何も言わなくても、みんなが予定調和的になっていたわけですが、今はそれが、自分の住みたいだけにこだわるようになってきている。それを何とか、住みよい住みたい地域づくりというのは、みんなが住みよい、みんなが住みたい地域づくりということで、「みんな」はわざわざ言うまでもないから入れていないだけの話であって、実際にはみんなが住みよい、みんなが住みたい地域づくりの中で自分たちは何に貢献できるかということを考えながら行動していくべきなのです。

みんなが住みよい、みんなが住みたいというイメージがうまくまとまっていないならば、その地域でどのような夢を描いていくかということをきちんと話しあわなければいけないと。そういう結節点になるときに、例えば学校はパスだという話もありましたけれども、学校は少なくとも一つの核になる。ただ、学校だけではなくて公民館でもどこでも核になるわけで、多重な核の中で話しあいをつなげながら活動を重ねていくということが必要なわけです。そのときに、たまたま学校には地域教育コーディネーターがいて、公民館には公民館職員がいる、ほかのところにはほかのコーディネーターがいるかもしれない。そういうものがうまくバランスを取ってつながっていくことを目指していくことが必要なわけです。

(西田委員)

価値観の違う人がたくさんいるということですよ。価値観が1個だと不幸になる人が一番多いということですね。

(雲尾委員)

例えば不登校の子どもがいたとして、学校はこの子どもに学校に来させて、学力をつけてあげたいということだけを願って、学校においでという。でも、そうではないことを願っている人もいて、

第29期新潟市社会教育委員会議

そういう場に行ったほうがその子自身は輝けるかもしれない。それは両者が離れたままで、それぞれの夢を実現しようとしても、その子にとってはかえって不幸なわけです。その子を中心として関係する人がお互いにきちんと話しあう中で、その子にとっての一番いいことは何かということが出てくるはずなのだけれども、その話しあいができなければ、だれかがコーディネートすることが必要だろうと。そういう関係ですよ。

(相庭議長)

学校教育、社会教育というのは、ある意味、距離的に非常に離れているのです。ですから、なかなか難しいのです。それに橋を架けてくれるような役割だろうというのは雲尾先生のお話です。形式的に見ると、戦前、社会教育は大変不幸な歴史を背負っています。学校教育とは違って、社会教育の社会というのは規律とか秩序というものに一番遠い社会なのです。

一番いい例は、きついことは言えば、公民館の講座なんてあつという間に不登校を起こしますからね。中央公民館の難しい講座なんていうのは不登校率 30 パーセント、40 パーセントが当たり前です。市民活動というもの対してある価値を押しつけていくということにアレルギーを持っているということで理解していただけるといいと思います。

そろそろ時間が迫ってきたのですが、とにかく建議を書かなければいけないということで、起草委員の先生方にいろいろと言って、イメージを作っていただくというのがこの時間の仕事でございました。

(雲尾委員)

本来は、第1章のところでは、家庭教育力、地域の教育力が低下しているような状況があつて大変ではないかと。第2章に調査結果があつて、第3章で方向性を示そうというのが本来の構想だったわけですがけれども、今日の皆さんの話からいうと、第1章のところは、新潟市はそんなに悪くないのではないかとということが、どちらかという第1章のあたりでは流れとして出てきたというのが一つ。そこで、それをどう組み立てるかということで、今日の会議では第1章の柱をたくさん出してほしかったけれども、皆さん、前向きなので、第3章の方向性がどんどん出てきたというわけです。逆に、第3章の内容が、今の段階だと盛りだくさんになりすぎていて、これはこれで困るし、第1章については内容がほとんど出てこなかったもので、これはこれでという状況だと思うのです。今日の全体の流れを通していくと。そうすると、第3章の中を通して出てきたような内容を、ある程度第1章のほうにも分けながら、少し組み立て直しが必要なのではないかというのが、今日全体の話ではないかと思ひます。

(相庭議長)

少し無理な注文をすると、第1章をダイエットしてしまつて、少し絞つて、第3章の部分が量的に多くなるという感じでよろしいのではないかと思ひます。少し無理でしょうか。

(雲尾委員)

第1章の方向性を、それなりにいいところもあるということはある程度出してもいいのではないかと思ひます。完全な危機感から始まつたわけでもないし、けっこう危機的状況かと思つて始めてみたら、そんなに危機的でもなかつたけれども、それでも危機を感じる部分も多いのではないかという話にしたほうがいいかと思ひます。

(生涯学習課長)

今、雲尾委員からもお話がありましたように、調査の結果から見ると、どちらの調査も全国的に比べれば教育力が落ちているわけではないし、私たちが前もつて、危機的状況がどんなものかという問題意識を持っていましたけれども、そうでもない。今回、この話しあいの中でありましたものから、問題意識的なものを抜き出させていただき、書いていただいた資料4のペーパーを置いていっていただきまして、そこからも抜かせていただきながら、第1章をわりと軽めに、第3章に重点を置きながら構成させていただきたいと思ひます。

(相庭議長)

第29期新潟市社会教育委員会議

今、玉木課長からご提案がございましたが、そのようなことでよろしいでしょうか。
では、それでよろしくお願ひしたいと思います。
それでは、以上で、予定しておりました議案については終わりなのですが、「その他」がござい
ますが、事務局より何かありませんでしょうか。

(事務局)

今年度の成人式が、来年1月8日に朱鷺メッセで開催されます。例年、社会教育委員の皆様から
も、任意なのですが、出席していただいております。昨年度は笠原委員と新藤委員から参加してい
ただきまして、ありがとうございました。今年度も12月上旬、10日前になると思うのですが、皆
さんのほうにご案内を郵送させていただきますので、出欠のご返事をお願いします。ご都合のつく
方はぜひ参加をお願いします。1月8日は、受付開始が12時半から、1時から実行委員会が企画し
たイベントがありまして、2時から式典、2時45分に終了となっています。よろしくお願ひい
たします。

(相庭議長)

委員の皆さん、時間が許せるのであれば、極力参加していただきたいと思います。よろしくお願
ひいたします。

その他ございませんでしょうか。

それでは、事務局にお返ししますので、よろしくお願ひします。

(事務局)

お疲れさまでした。

では、次回の会議のご連絡でございますけれども、来年1月24日(火)午後2時から白山浦庁舎
7号棟4階の405号室を予定しております。後ほど文書でご案内を差し上げたいと思います。

以上をもちまして、第29期社会教育委員会議第10回を終了します。お気をつけて帰りください。
ありがとうございました。